



平成16年入所時

「〇活」の終焉

弁護士 住田 浩史



1 寝ても覚めても「〇活」

街中に「〇活」が溢れています。「婚活」、「就活」、「保活」あたりは既に国語辞典にも掲載されていますが、インターネット上では「友活」、「パパ活」、「ママ活」、「育活」などもあります。最近、電車内の広告で「眠活」というのも見かけました。どうやら、快適な睡眠をとるための活動ということです。

寝ても覚めても、ゆりかごから墓場まで「〇活」の時代がやってきたようです。¹

2 略語性

この「〇活」の本質は、一体何でしょうか。まずは、それが全て「略語」である、ということ（略語性）から考えてみたいと思います。

元祖(?)である「就活」も、つい10年ほど前には略さずに「就職活動」と言われていました。就活と就職活動は、違います。前者は、後者をいわばキャラクター化、類型化、マニュアル化したものです。「キムタク」という略語も、木村拓哉さんそのものではなく、そのキャラクターを表すものとして使われていますね（例：木村拓哉は「キムタク」という演技しかできない）。

このように「〇活」は、「何かを獲得する（あるいは客体として獲得される）ために、必要な行動を手取り早くマニュアル化したもの」と定義できるでしょう。

3 マーケティング性

また、より本質的な性質は、マーケティング性です。

就活も、そう略語で呼ばれ出した頃から、インターネット上で情報を登録させ企業に「エントリー」させるというビジネスがあつという間に普及しました。また、「〇活」と「コンサルタント」は相性が良く、巷にも「〇活コンサルタント」がたくさんおられます。これまで商売にならなかった分野でお金を稼ぐために、「これくらいみなさんやっておられます、手前どもが集積したノウハウがあれば大丈夫ですよ」と優しく有益な情報を提供する、というマーケティング性こそが、「〇活」の本質といえます。これは、実は、上記の略語性とも分かち難く結びついています。「婚活活動」では商売になりません。なんとなく堅いですね。そして、ヘタをすると、「ほんまはそんな活動なんかやらないやろ」というツッコミが入りそうです。そうではなく、「婚活」という言葉を用いることで、「ああ、あれね。なんか、ようわかれへんけど、結構みんなやってはるみたいやね」と、それだけで何となくモノが売れそうな気がしませんか？ すごいですね。私も、弁護士ではなくて、今後は「訴活コンサルタント」と名乗った方がいいでしょうか。

このように、「〇活」と広告業の相性が異常なまでによいからには、「〇活」が濫用されるのも無理はありません。「〇活」という言葉が嫌いな方は、しばらくの間は我慢するしかないと思います。

4 「〇活」との付き合い方

では、「〇活」とどう付き合えばよいのでしょうか。まずは、「〇活」との略語を聞いて、全てをわかった気にならない、ということです。木村拓哉さんにも（当たり前ですが）キムタク以外の側面があるように、職業、恋愛、友情といった事柄にも、「〇活」では捕捉し切れないものがたくさんある、ということです（睡眠については、あまりよく知りませんが）。むしろマニュアル化、類型化されていないことこそが、大事ではないのでしょうか。話は少し脱線しますが、あるSNSの出会い系スパム広告で、「モテるための掟 〇箇条」のようなものがあって、その中の第何箇条目かに「恋愛マニュアルを学ばないこと」という大変パラドキシカルな項目があったことを思い出しました。

また、「〇活」では、誰でもできることがマニュアル化されています。そうでなければ、「そんなん、できひんわ」となって、売れません。逆に考えると、そこには、(結婚や就職等の客体として)「あなた(それ)でなければならないこと」、あるいは(主体として)「わたしでなければならないこと」は、ひとつもないのです。「〇活」によって獲得した(あるいは獲得された)経緯がそういうものであって、果たして、その後の「〇」(結婚、キャリア)はよいものになるのでしょうか。これは、大学1回生のときに社会学の講義で教わったことですが、芹沢俊介は、養親が養子に真実告知するときには、養子であること、あなたを選んだこと、よかったと思っていること、の3点だけを告げるべきであり、選んだ理由を語ってはならないと述べています。「～という条件だから選んだのだ」「～という条件を満たしたから選ばれたのだ」ということでは、何か上手くいかなくなったときに、「やっぱり思ったほど～ではないから嫌だ」「どうせ、相手も自分でなくてもほかでもよかったのだ」ということになりかねません。「〇活」をなぞるだけで、就職や婚姻という重大な社会的責任を、自ら引き受けることができるのでしょうか。

5 「〇活」の終焉

広告業界の好きな流行語の宿命として、「〇活」が、いつかは廃れるであろうことも予測できます。個人的にはこのことばには早く時代遅れになっていただきたいのですが、ひょっとすると、それはマニュアルがなくなるのではなく、マニュアルが一般的、全般的に浸透しきってしまうという形で終焉するのかもしれない。

そうなるると、究極形として、人生の全て、すなわち「生」のマニュアル化として、「生活」ということばが生まれるのかもしれない。ひょっとして、既に、そういう時代になっているって？ なんだか、少し、映画「マトリックス」のような話になってきました。

¹ 本稿の脱稿直前にインターネットで調べてみたら、「〇活」については、既に2014年の段階でまとまった論評が出ているようです(大内裕和 竹信三恵子「全身〇活」時代-就活・婚活・保活からみる社会論、青土社、2014年5月)。ぜひ、読んでみようと思います。